

きっしょうてん  
『 吉祥天 』

— 鎮魂 —

陸前高田の奇跡の一本松に寄せて

【間狂言の口上】

時は慶長十六年三月十一日、陽春の光長閑き陸奥国に、人知の及ばぬ未曾有の大地震が発生致し候。

寸刻の後、俄かに海原盛り上がり、その山の如き大津波、高さ百尺余りなり、風光明美、漁場豊かなる浜松原

を撃ち襲い、村落人々悉く呑みこみ奪い攫われし候也。げに恐ろしけるかな大津波。げに恐ろしけるかな大津

波。天災はかくも無情に人の営み打ち崩し、儂き現世修羅場の極みに耐えがたく、また行く末も忍びがたし。

生き残れし村民漁民心して、郷土再起復興の願い唯ただ祈る日々。

只今よりこの能の次第は陸奥国の復興と、希望のしるしと祈念して陸前高田の浜に生き残りし奇跡の一本松。

人々が語り継ぎたる其の奇特の物語にて候。陸奥国、陸前高田の白砂青松、松原に在りし七万本の松の

木、かの恐ろしき大津波に悉く押し流され跡形もなく成り果てし候也。しかしながら失せ給いし陸前高田の松原

に、ただ一本の松の木が無慈悲なる大津波にも耐えしのびて生き残りし候。只今も陸前高田の民に祀られし

奇跡の一本松。その奇特なる、靈驗あらたかな「奇跡の一本松」に纏わる物語。とくにご観覧候へ。

【前場】「事ノ次第」

[ワキ、ワキツレ]

「さて、此処は風薫る緑爽やかなる京、東山山麓清水寺の田村堂にて候。今まさに、この寺創建の征夷大將軍坂上田村麻呂公の八百年忌、祈念法要を奉らんとするところなり。

祈念法要を奉らんとするところなり。」

〈ナリ〉[ワキ]

「そもそも是は清水寺に使者奉る僧にて候。さても征夷大將軍坂上田村麻呂公の八百年忌の法要を執り行わんとする所、しかしながら永年この日に詣で来たる陸奥の参拝者達、おん年は余りにも姿少なく候にて、如何なるかその訊を尋ねてみんとするなり。」

[ワキ]

「如何にある。この度の田村麻呂公八百年忌の祈念法要に、参拝せし陸奥の民少なきことの由を、聞かせめしと尋ね申し候。」

[アイ]

「問われて応える悲しき次第、問われて応える悲しき次第、暫く聞し召せと存じ申し候。」

「梅花ほころぶ春を迎えしころ、我らが住まい致す陸奥国一帯に、げに恐ろしき地震あり。すこぶる長く大地の揺れたる様は世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海傾きて、陸地をひたせり。暫らくして常は静かなる海原の彼方より、山の如く現れし大津波、浜に向かって襲い来りて候。我らの住まいする村落もろともに、村民漁民たち悉く大津波に呑みこまれ海の藻屑となりけり。海の藻屑となりけり。」

[アイ]

「生き残れし我ら村民も家門<sup>いえかど</sup>失ひ、家族<sup>ともがら</sup>輩失ひて候。余りに無慈悲なる天の所業に心虚しうなり果てし候。儂<sup>はかな</sup>くも、亡くなり給いし御霊<sup>みたま</sup>の法要も未だ果せぬ次第なり。唯ただ悲しき有り様に泣き暮れて、やがて涙も枯れ果てし候也。我ら生き残れし陸奥の民、せめてもと祈る想いを携えて、縁<sup>えに</sup>し深き清水寺へと長き旅路乗り越えて、辿り着きて候なり。この度の田村麻呂公八百年忌の祈念法要に参詣せんと参り候。儂<sup>はかな</sup>くもかの大津波に攫われ給いし御魂<sup>みたま</sup>の鎮魂法要を、かの地にて執り行い給うとの請願を申す次第なり。請願申す次第なり。請願申す次第なり。」

[地謡] [ワキ]

「そは、げに恐ろしき次第なり、げに恐ろしき次第なり。慣れ親しき村民の行方も知れず、失せし御霊の儂さよ、

悲しき思い聞かせられ哀れなる、落涙の流れ止まらず。聞きし者、皆落涙の流れ止まらず。」

[ワキ]

「我等が僧侶これより直ちに陸奥に赴き参らん程に、案内あない願ひ候。」

「陸奥国平泉には、征夷大將軍坂上田村麻呂公が建立奉りたる達谷たっこく いやの窟ありて、京の鞍馬寺より勸請せし百八体の毘沙門天を祀りし。毘沙門堂に先ずは参らんとぞ存ず。」

[地謡]

「京より一月ばかり。はるか海路山路の旅の末、ようよう、陸奥の国、達谷の窟、毘沙門堂に着きにけり。

毘沙門堂に着きにけり。毘沙門堂に着きにけり。」

[地謡]

「ここは奥州藤原の郷、仏国浄土の聖地なり。これより征夷大將軍坂上田村麻呂公勸請の毘沙門天 鎮座まします毘沙門堂にて、鎮魂法要執り行ふなり。鎮魂法要執り行ふなり。」

[ワキ]

「我等は京より はせ参りし清水寺の僧にて候。この度の大地震大津波の犠牲ともがらたちとなりし輩 達御霊の鎮魂法要嘗まんとするなり。」

「南無大慈大悲毘沙門天。南無大慈大悲毘沙門天。南無田村大將軍、南無田村大將軍。

オン ベイシラ マンダヤ ソワカ オン ベイシラ マンダヤ ソワカ。」

[地謡]

「風爽さやかに青葉の松に藤の花。陸奥の郷、仏国浄土平泉の郷、山川草木国土悉皆成仏なり、時の流れの行く末に祈り参らせ儂き御魂、只今は鎮魂供養執り行ひ奉らう毘沙門天。声明聞し召せと声合わせ、内鳴り響く毘沙門堂。内鳴り響く毘沙門堂。」程なくて、何処より聞こえる声ありて候、何処より聞こえる声ありて候。

其の御言葉、「誰かある、心して陸前高田の松原に参り候へ、参り候へ。」

何処ともなく毘沙門天のお言葉響き渡るなり。毘沙門天のお言葉響き渡るなり。

[ワキ]

「やれ、ありがたや毘沙門天。やれ、ありがたや毘沙門天。奇瑞の兆し賜りて、陸前高田の松原へ直ちに案内申し願ひ候。直ちに案内申し願ひ候。」

[間狂言の口上]

この地は奥州藤原三代が浄土実現を成し遂げんと、現世佛国として平安と豊穰もたらせ給う浄土なり。

<sup>いにしえ</sup>古は先住の民、蝦夷アテルイ達の住む処。平和な風土でありし郷。やがて、桓武帝の勅により征夷大將軍坂上田村麻呂公が帝の国土として平定せしめし<sup>むつのくに</sup>陸奥<sup>のち</sup>国。其の後、征夷大將軍田村麻呂公の戦勝記念、蝦夷の民アテルイ達の供養にとこの達谷の窟に毘沙門堂を建て奉り。<sup>みやこ</sup>京の洛北鞍馬寺より勧請したる百八体の毘沙門天像お祀り致し候なり。それより後は陸奥の民等の崇敬を得て盛りなり。今も参詣する民の姿あと絶えず、この度の大地震にも耐えて残りし毘沙門堂。毘沙門天様の功德を賜り申さんと、参詣する人絶え間なく候。

[後場]

[ワキ]

「これは早、陸前高田の浜に着きにて候。陸前高田の浜に着きにて候。」

「かねてより聞き覚えし高田の松原は姿も見えず跡形もなし。荒れ果てたる浜の松原姿無し。」

「如何にあるらん気色かな、のどけき陽光変わりなく澄み渡りたる天の下、人の営み立ち消えて、ものの哀れぞ悲しけれ、ものの哀れぞ悲しけれ」。

「あれ不思議かな、不思議かな。あれなる松と思しきは、まさに立ちたる一本の松の影。そは、如何にぞ此処に在りたるや。そは、如何にぞ此処に在りたるや。」

[陸奥の民]狂言方

「あれなるは、この陸前高田の松原に残りし一本の松にて候。かの松は此の度の大地震大津波にも耐え忍び、生き残り給いし奇跡の一本松にて候。」「我ら村民漁民も不思議なる思いして如何にして守らんと思案の次第程なりて候。」

[ワキ]

「そわ不思議かな、不思議かな。かの一本松の下、二人の影と思しきが如何にせん。誰なるか訊ねんと存ず。」

「いかに是なる翁に尋ね申すべきことの候ぞ。この一本松の下、掃き清めたる由は何故なるか。聞かせばやと存じ候。」「また、この一本松残れし謂れを尋ねばやと存じ候。」

[前ツレ] 老人

「掃き清めたる一本松は古より在りし<sup>ようご</sup>影向の松にて候、影向の松にて候。」「天より神下り給ひし<sup>よりしろ</sup>依代の松にて候なり。白砂青松高田の松原の、守り栄えし山川草木国土悉皆成仏浄土の郷にて、この松こそ大事けれ。この郷に行く末長く守り給ひけれ。行く末長く守り給ひけれ。」

[前シテ] 高貴な夫人

「願わくは我らが申し渡さん<sup>ことわり</sup>理を、聞しめせと申す也。」「今宵、この一本松の下にて、鎮魂法要執り行ない給われば、かならずや、奇特を示し申そうと存ず。」

[地謡]

やれ、不思議なる<sup>きしよく</sup>気色にて やれ、不思議なる気色にて、

やがて「我は人にはあらず、吉祥天なるや」と申し述べ、伴の翁も海中に入らせ給ひし白波の、立ち返り

「我は<sup>なかつくに</sup>中津国の守護、<sup>もも</sup>百々乃龍神」と言ひ捨てて、瞬く間にも白波に入らせ給ひけり。白波に入らせ給ひけり。」

「中入来序」

## [地謡]「クセ」

「諸尊諸仏の守りし極楽浄土の陸奥の郷、今宵、此の度の大地震大津波に奪われし御魂と衆生の除災招福祈願せしめんと 奇跡の一本、松の下。皆一同に声合わせ、月冨え渡る海原に、聞こしめせと申う声明の、祈り唱え給ひし魂鎮め。祈り唱え給ひし魂鎮め。」

## [出端]「キザシグリ」

これは陸前高田の浜、日月の光に輝く一本松。日月の光に輝く一本松。

煌めく波間より飛び出でたるは百々乃龍神 百々乃龍神。現われ出でたる百々乃龍神。

天に百、地に百の恵みの力合わせ持ち、古に伊耶那岐命を救いし如く、葦原の中津国の衆生を救わんと、現われ出でたる百々乃龍神、意富加牟豆美命の化身なり。やがて虹色に光輝く海の泡より現れ出し吉祥天。

美目麗しき吉祥天。その御手に捧げる御珠は金色に輝く如意宝珠、声明に合い和して舞い給ひしは

有難き吉祥天の神神楽。 有難き吉祥天の神神楽。

## [後シテ] 吉祥天

「そもそも是は日の本の衆生守りて、海山川治める吉祥天とは我が事なり。」「この度の未曾有の大津波、儂くも失ひし御霊に捧げる如意宝珠。祀りて祈り給えれば 是より再び穏やかなる浄土となり候。心して祈り給えと申す也。」

## [ノリ地]

虚空に妙音響き渡り、忝くも吉祥天、百々乃龍神伴いて静かに舞い降り給いて、金色銀色七色に光り輝く波しぶき撒き散らし、除災招福の祈願せしめんと。

「もとより衆上、済度の誓い。もとより衆生、済度の誓い。」 様々なれば吉祥天の功德にて、鎮めし御霊と衆生の所願を叶えせしめんと、無施畏成願の印結び、満願成就干満塩土の印とて、授かり給ひし如意宝珠。

[ワキ]

「かたじけなくも祀り申さん如意宝珠。この一本松の下。奇跡の一本松。祀り申さん如意宝珠。」

[地謡]

「ようよう陽の明け渡る海原に、奇瑞示し給いし吉祥天、海神守護の百々乃龍神、浄土の誓ひ申し述べ  
浄土の誓ひ申し述べ。祈る間に夜明けの海に共々消え入り給ふなり。

声<sub>こゝろ</sub>和して祈り給いし僧達の、終わりも知れず声明の響き渡らん諸念仏、大海原に響き渡らせ給へ朗々と  
渡らせ給へ朗々と」。

[ワキ][地謡]

なむきちじょうまにほうしよによらい  
「南無吉祥摩尼宝生如来、オン マカ シリエイ ソワカ。南無吉祥摩尼宝生如来、オン マカ シリエイ ソワカ。  
南無吉祥摩尼宝生如来、オン マカ シリエイ ソワカ ……」

— 完

作・浅山 澄夫